

譯書彙編第一期

目錄

政治學	美國 伯益司著
國法汎論	德國 伯倫知理著
政治學提綱	日本 島谷部銑太郎著
社會行政法論	德國 海爾司烈著
萬法精理	法國 孟德斯鳩著
近世政治史	日本 有賀長雄著
近時外交史	日本 有賀長雄著
十九世紀歐洲政治史論	日本 酒井雄三郎著
民約論	法國 盧騷著
權利競爭論	德國 伊耶陵著

簡要章程

是編所用以政治一門為主如政治行政法律經濟政史政理各門每册所出或四種或五種間附雜錄
政治諸書乃東西各邦強國之本原故本編所先行此類中兵農工商各專門之書亦有譯出者以後當陸續擇要刊行
是編之外尚須刊列譯成全部之書目錄均附於後
是編由同人捐資刊辦尚祈同志之士贊助資助當酌量贈書以酬高意

定價

一月一册洋兩角 半年六册洋壹元壹角 全年十二册洋兩元 郵費在內

購閱 定閱本編可函向譯書彙編發行所掛號每期當按址寄送外埠可就近向各代派處購取
贈閱 價銀必須先付掛號後若不付銀及已交滿所付之價均一律停止不送外埠同
則 一代派處照定價提三成作為酬勞

本編要目

- 政治學 三種
- 行政學 三種
- 法律學 三種
- 政治史學 三種
- 政治學 兩種

譯書彙編

第一期

每月一回華歷十五日定期發行

禮が、荀子の梁論によつて生まれたとする見解は、もし文獻に内在于する性質を重視するという立場に立つならば、郷飲禮の文體が、荀子のそれより新しいという論證がなされねば、成り立たないであろうが、事實はむしろその逆であることを思わせる。

なおまた著者は、毛鄭以來の舊説を破するに急なるあまり、それらの舊説の理解について不十分な點があること、前にもふれた通りであるのは、やはりこの書物の欠點と思われる。あえて微細な例の一つをあげれば、「興」の概念に對する歷代の解釋をあげたうち、漢の鄭玄について鄭小同の「鄭志」をあげるが、これも實は鄭玄の説であること、いうまでもない。

また舊説を破するに急なるあまり、舊説をなすだけ自己の解釋に遠ざけて見る傾きも、ないではない。たとえば「興」の修辭が氣分象徴であることを、確定したのは、著者の功績の一つである。しかし著者の方向の解釋が、舊説の中に全くなかつたかどうかは、疑問であつて、「詩解における二千數百年の蒙を拂つた」という著者の自負は、やはりすこし性急であるかも知れない。著者が著者の見解と異なるものとして列擧された從來の學者の見解の中にも、著者の見解に近く私には讀み取られるものがあるのであつて、もし著者が引かれなかつたものをあげるならば、朱子が論語の子罕篇の「唐棣の華、偏として其れ反せり」云云につき、「六義に於いて興に屬す、上の兩句は意義無し、但だ下の兩句の辭を起すのみ」といつているのを、附記し得る。

(吉川幸次郎)

湖南時務學堂初集 (圖版第一)

光緒二十四年(一八九八)長沙で出版。内容は學約、界説、答問の三部からなる。學約は時務學堂の學約、界説は讀孟子界説・讀春秋界説を指し、何れも梁啓超の執筆にかかる。答問は時務學堂の學生の質問とそれに對する總教習梁啓超、分教習韓文舉、葉覺邁の應答である。學約、界説は飲冰室文集にも取められ、答問は翼教叢編、覺迷要録に抄録されている。しかしそれは抄録であつて、この書によつて始めて知られるものが甚だ多い。ことに學生の誰がどのような質問をしたかは、この書だけでしか判らない。珍重すべき一文獻である。

譯書彙編第一期 (圖版第二)

明治三十三年(一九〇〇)十二月六日東京で發行。譯書彙編は江蘇出身の留日學生が中心となつて發行した雜誌であつて「留學界雜誌の元祖」といわれるものである。この雜誌は廣く政治一般を對象として、歐米並に日本の著述の翻譯と紹介を目的としている。日清戦争後には、洋務的ないわゆる西學よりも、變法的ないわゆる西政に對する關心が高まつてくるが、この雜誌によつて一應の實を結んだということも出来る。啓蒙的な雜誌であるけれども、そこに譚駁されたルソーの民約論・モンテスキューの法の精神は、變革思想を鼓吹する上に重要な役割を果している。これはその創刊號の表紙と目次である。